

『想定外』に立ち向かう 地域を育てるためには

東京大学大学院情報学環特任教授・
群馬大学名誉教授

片田 敏孝

災害がハードを超えた時、 最後は地域の力、人間の力

未来を担う子どもたちは、災害が荒ぶる環境の中で大人になり、次の世代を担ってもらわなければなりません。しかし今の子どもたちを見ると、どちらかと言えば対応力がなく脆弱ではないかと思えます。我々が背中を見せて育ててきたからしかたないですね。

もう少し地域のありようや災害に向かい合う姿勢を正していかなければいけないと思っています。

こんな問題があります。人為的に作り上げる安全は必ず、その陰で人間の脆弱性も高めます。財政的な話を一切抜きにすれば、堤防がどんどん高くなるのは安全度が高まるわけで、悪いことではありません。その分、物理的な安全度は高まります。でも人間には、「あれができたからもう大丈夫」という心理が必ず出ます。そうやってヒューマンファクター、人間側の脆弱性が高まったところで、時に自然災害は荒ぶるので。3・11を見ても、場所によっては30メートルぐらいの津波が来ました。

それなら30メートルの堤防をつくるという議論には、なりません。物理的に安全をどこまでも追求するのは、もちろん無理があります。自然の営みを人間が科学的、物理的に抑えられるというのはおごった考え方だと言えらると思います。

だからといって、ハードの否定ではありません。ハードはハードで大事ですが、それを越えることが起きます。その時、やはり最後に頼れるのは地域の力であり、人間の力です。そこを見誤ってはけません。

別に、国土強靱化論には反対しません。しかし、物理的な安全を高めるほど人間は弱くなりますから、国土強靱化に整合した国民強靱化が重要です。高くなった堤防に安全を委ねると、過保護な親のもとでひ弱な子どもが育ちます。ですから国土を強靱化したら、国民も強靱化する必要があります。そのバランスが大

事だと私は主張しています。

あまりこの言葉は使いたくないのですが、想定外、思いもしないようなことは起こります。それでも何とか立ち向う地域を、我々はつくりたいといけません。私の立場も、議員の皆さんの立場もそうだと思います。地域の方々をリードする立場にある人は、どんな姿勢で災害に向かいあうべきか。我々はその基本的な思想を持っているか。そんな姿勢で地域の方々に向かいあわねばならないと思います。

数字を見て安全だと思っても、 そこには落とし穴がある

防災白書に書かれている東日本大震災以降の自然災害で目につくのは火山で、熊本地震など地震とともに「地象」災害が目立ちます。これは間違いなく東日本大震災以降、地面の下が不安定になっているためです。全体を見渡すと地象が荒ぶるだけでなく気象災害も多いのですが、これは明確に温暖化の影響と言ってもかまわないと思います。

国が算出した向こう30年間に震度6弱以上に見舞われる確率ですが、2016年版の確率評価は熊本は7.6%、鳥取県の倉吉は0.6%でした。その他の、よく言われる南海トラフ地震とか首都直下型地震の確率は7割ぐらいの数字が出ていて、見るとドキッとしますが、7.6%や0.6%という数字を見ると、どう思うでしょうか？ そこに住む人たちはどう思うのでしょうか？

我々は、そんな数字を見ると「まあ大丈夫だろう」と言いたくなります。例えば熊本市は企業誘致のホームページに「熊本県は安全地帯です」と書いていました。この部分は震災後すぐ4月20日の段階で削除されています。

「安全だと思っている」とは、備える対象はないと知っていることです。それでは防災など、できるわけがありません。

「安全神話」は全国にあるようですが、地震がない

片田 敏孝 (かただ としたか)

略歴

1995年 群馬大学工学部建設工学科講師
1997年 群馬大学工学部建設工学科助教授
2000年 京都大学防災研究所客員助教授
2001年 アメリカ・ワシントン大学客員研究員
2010年 広域首都圏防災研究センター センター長
2010年 東京大学大学院 豊橋技術科学大学 静岡大学 客員教授
2017年 現職

主な著書

『3. 11釜石からの教訓 命を守る教育』PHP研究所
『人が死なない防災』集英社新書



と言っていた近畿で阪神・淡路大震災が起き、熊本でもそうでした。皆さんの地元に安全神話のような思いが少しでもあるようでしたら、私はこの場で全否定します。全部捨ててください。安全神話はもう間違いです。

12時間雨量が1000ミリを超えた九州北部豪雨の実例

災害の際は、行政対応の限界も、地域対応の限界も、個人対応の限界も見えます。社会が丸になってどう向きあうか。専門家や地域を代表される皆さんが地域をどう誘導するか。それは喫緊の課題だという認識を持っていただきたいので、九州北部豪雨での具体例を紹介したいと思います。

この雨の降り方は、常識をはるかに超えていました。「線状降水帯」と言い、同じような場所に雨域が固まって、福岡県朝倉市や大分県日田市あたりの地域は特にひどいことになりました。記録的短時間大雨情報が7回も出ました。

朝9時、ところによっては晴れていました。天気予報は「大気が不安定なので、ところによって急な雨が降るかもしれません」ぐらいは言いますが、すごい雨が降るとは言っていません。そして昼頃、突如時間雨量100ミリ近い雨が降り出しました。「なぜこの時、避難勧告を出したり逃げたりしなかったのだろう」と思うわけですが、そんなこと、ひと言も言われてないうちに100ミリぐらいの豪雨が降り始めたわけです。

そうすると、この地域ではアスファルトの上を水がドーンと流れ、中には小石が混ざってゴロゴロ転がります。若く元気でも、足を突っ込むとまっすぐ立つことさえできない状態です。おじいちゃんやおばあちゃんなら1回倒れると、流れの中で間違いなく立ち上がれません。そんな雨が突然降り出したら当然、様子を見ます。みんな逃げません。しかし雨はさらに強くなり、そのまま9時間、10時間と続きました。

私はその現場で「もし自分が住民だったら逃げたでしょうか」と考えました。これまで住民の人たちにさんざん「行政にゆだねるな」「危ないと思ったら迅速な対応行動を自らとるべきだ」「自助が大事だ」と言ってきましたが、私がもし住民だったら逃げられたらどうかと考えたら、逃げられなかったでしょう。無理です。

行政の対応ですが、朝の段階で正確な天気予報を出せなかった気象庁は、12時台にひどい雨が降り始めると1時14分になって大雨洪水警報を出しました。「何をやってるんだ」と言いたいかもしれませんが、気象庁も懸命に予測しようとしていました。日本の気象予測技術は観測機器も含めて世界一のレベルです。にもかかわらず、それだけ遅れました。記録的短時間大雨情報が最初に出されたのは1時20分、土砂災害警戒情報が最初に出されたのは2時10分でした。これらは降った後に雨量の実績に対し出されますから、しかたありません。そして特別警報が出されたのが5時51分でした。気象庁も、少しでも防災に役立つ情報を出そうといろいろ努力したのですが、気象情報は全然間に合いませんでした。

気象庁でもそうですから、市町村の避難勧告や避難指示はどうかというと、避難準備情報が出されたのは2時15分でした。全然間に合いません。避難勧告が出されたのは2時26分、避難指示に切り替えたのは3時10分以後でした。災害はすでに起こっていて、行政の職員数が限られている中で住民からの電話が次から次へと鳴り、電話対応を一生懸命やりながら、準備情報、避難勧告、避難指示を矢継ぎ早に出したのですが、事態のほうが先に展開してしまったという状況でした。

状況は今後、さらに厳しくなります。近年で発生する災害は圧倒的に気象災害が多いのですが、原因は明確です。温暖化です。地上に暮らしていても温暖化を感じますが、海洋気象は一足も二足も先に温暖

化が進んでいます。海水温が非常に高い状況は今後、厳しい状態をもたらします。

雨の降り方で明確に断言できることがあります。東北や北海道の豪雨災害がこれから大変なことになります。というのは、もともと緯度が高い北のほうの雨は穏やかなのですが、それが南方のスコールのような大雨に変わっていくからです。

国連機関の地球環境に関する専門家会議（IPCC）が出した温暖化予測値を日本で展開するとどうなるか国土交通省が推計したところ、北海道、東北で降水量が2割以上増える結果が出ました。全国的にほとんどの地域で増えますが、特に北日本の豪雨災害が深刻になります。

何が問題かといえば、治水は過去100年ぐらいのデータから100年に1度の出水はどの程度か見定めて、堤防の高さを決めているからです。そのため、もともと穏やかな雨しか降らない北日本は大した高さの堤防になっていません。過疎の問題もあります。超高齢化、過疎化が進みコミュニティが消えかけている状況で防災をどう考えるかは、極めて難しい問題です。「お住まいになっている以上お守りたい」という気持ちはあるが、そのために防災工事を行ってダムもつくるかという、それは現実的でないのです。

毎年起こる気象災害に対する防災にも、絶対に手を抜いてはいけないと私は思います。どこでも起き、日常生活を破壊する気象災害に対する地域の防災力を高める。人命だけは何とか守る。私はそれができる地域に育てていきたい、誘導していきたいと、強く思っています。

「台風は日本列島のより近くで発生し、強い勢力のまま列島を縦断する」

次は台風です。異常に大きくなっています。観測史上最大の台風は室戸台風で、上陸地点の気圧は911ヘクトパスカルでした。伊勢湾台風も929ヘクトパスカルです。ところが今年の台風21号は上陸寸前まで925ヘクトパスカルでした。2013年にフィリピンのレイテ島を高潮が襲った台風30号は890ヘクトパスカル台でしたが、毎年、1つか2つは900ヘクトパスカルを切るまで成長する台風が現れています。

台風とハリケーンは、ハリケーンのほうが強烈なイメージがありませんか？ どちらも同じような緯度で発生しますが、ハリケーンが発生するカリブ海付近には国がたくさんあり、アメリカのフロリダ半島も近い。勢力が強い時に被害を受けるのでハリケーンには強烈なイメージがあります。一方、台風は太平洋の真ん中で発生し、暮らしている人がいない。つまり被害を受ける社会がない。そこで勢力が強くても、北上して弱く小さくなってから襲ってきます。だから台風はハリケーンよりも小さいイメージがあります。

ところが実は、エネルギーを集める領域は太平洋のほうが広いので、同じ熱帯低気圧のカテゴリーではハリケーンより台風のほうがより大きく、より強烈です。その台風の発生場所が、より高い緯度になってきています。これまでの平均はだいたい北緯16度付近でしたが、海水温が高くなったために日本近海でも発生するようになりました。発生場所が日本の近くだと、勢力が強いままずっと北上、上陸します。紀伊半島から関東にかけて上陸し、勢力そのままに東北を縦断して北海道に至る台風のルートに変わりつつあります。

「災害時は、行政全部署が平常モードから災害モードに切り替えて仕事をするべき」

太平洋側の津波は周期的に必ず襲ってきました。このような災害に事前に備えることが防災です。津波が来てから助けあうのは防災ではありません。自然は時に荒ぶるが、事前に、その時に犠牲者を出さない地域にしておくことが、私は防災の第一義的な意味だと思います。各自治体で指導していただきたいのは、被害を受けたらその時にどうするという議論ではありません。助けあうのは人間として当たり前ですが、もっと大事なことがあります。それは人が死なない、地域から犠牲者を出さないことです。

食料はあるのか、避難所は大丈夫かは、生き残った後の話です。そうなる前に、死なせてはダメです。まず、地域から犠牲者が出ないようにする。今は災害の条件が整っても幸いその時を迎えていない「未災」の状態です。しっかり対応すれば、大きな台風が来ても、「うちは大丈夫だった」と言える結果を勝ち取れる。それが防災です。

これまで私たちは「避難勧告が出たら逃げる」を防災の基本にしていました。しかし、それはもう破たんしました。行政が住民の皆さんに「逃げなさい」「ちゃんと従いなさい」と言う、ある意味役所任せの、情報任せの避難体制はもうできません。市町村合併で面積が大きくなると、ある場所でものすごい雨が降っていても、離れた役所ではわかりません。局所豪雨、いわゆるゲリラ豪雨は局所的なので、離れていたら把握できません。

災害が起こったら防災担当課だけでなく、行政の全ての部署が平常モードから災害モードに切り替えて仕事をするべきです。教育委員会は日ごろは学校行政をやっているけれども、災害時には避難所の運営もやらねばなりません。福祉課は日ごろはおじいちゃん、おばあちゃんのことだけ考えているかもしれないけど、災害になったら要援護者対策の最前線になるはずですよ。

豪雨災害では避難勧告が一定の地域に出されますが、地域の中には低い場所も高い場所もあります。

低い場所でも、木造平屋建ての家屋もあれば、鉄筋や鉄骨の3、4階建ての家屋もあります。住民にもいろんな人がいます。でも行政としては、その地域の低い場所に1軒でも木造平屋建ての家屋があれば避難勧告を出します。では、高い場所に住む人でも、わざわざ濁流が流れる道路を歩いて学校の体育館に行かないといけないのでしょうか。行ったらダメです。逃げたらダメです。

役所は住民一人ひとりに「あなたは逃げて」「あなたは逃げないで」と言えませんから、住民一人ひとりが自分がとるべきベストな行動は何か、自分で考えないといけません。行政が避難勧告を出したら必ず従わないといけないのではなく、自分の命を守るとは、どれだけ自分の命を守ることに主体性を持てるか、ということなのです。

ところが、どうでしょう。皆さん地域の方々一人ひとりの顔を思い浮かべてみてください。どちらかと言えば防災は行政依存になっています。逃げないといけない時は避難勧告で教えてくれると思っています。避難所に行けば食料も毛布も、あらゆるサービスが受けられると思っています。それではいけません。おかしいと思ったら自分の判断でちゃんと動ける。それぐらいの主体性を求めないと災害からは守りきれない状況になってしまっています。

私は今年の九州北部豪雨は、個人の方だけでは逃げられなかったと思います。「あれっ」と思っても、ちょっと様子見して、そのまま雨が降り続いて、被災者になってしまう。それは自助の限界だと感じました。しかしこの地域の方々、前回の水害の経験に基づいて「こうなったらみんなで逃げよう」というルールを決めていました。おじいちゃん、おばあちゃんにも声をかけ、みんなで逃げました。その後土砂災害が起きましたが、犠牲者は出ませんでした。私は地域の力というのは見事だと思いました。防災は地域の力だ思い知らされました。

今後は、行政には頑張ってもらい、個人の意識も高く保たねばなりません。さらにもっと大事なものは地域としてどう向きあうか。どうか、犠牲者を出さない地域づくりの方向に誘導していただきたいと思います。

昔の津波の碑を見た釜石の子どもたちは自分たちの教訓を生かしてほしいと言った

釜石で難を逃れた話ですが、あの津波もまさに「未災」状態の中で起きました。

東日本大震災の震源域は南北500キロです。割れ始めると南と北に向かってバリバリと割れましたが、3分も4分も揺れ続けました。そのため震源域の海水が持ち上がり、大津波になって襲ってきました。

周期的に起きる太平洋の津波を受ける三陸地方に

は、津波のたびに建った数え切れないぐらいの碑があります。私が行った釜石市は34基あります。宮古市の姉吉には「高き住居は児孫の和楽、想へ惨禍の大津浪、此処より下に家を建てるな」と書いてある碑があります。これは教訓ですが、建てた人は、どんな状況で、どんな思いで建てたのか、考えてみましょう。

明治三陸津波当時の釜石町の人口は約6500人で、約4000人が亡くなりました。町の人口の3分の2がいっぺんに死んでしまった壊滅的事態ですが、その被災者が碑を建てました。どんな思いで建てたのでしょうか。悔しくて、こんな思いをするのは自分たちだけでこりこりだと、失意のどん底の中でなけなしのお金を出しあい、思いを刻んだ碑を一個一個、建てていったのです。しかしいつしかそれは読まれなくなり、過去の先人の思いは生かせませんでした。

今、釜石の子どもたちに「何が一番の望みか」と聞くと、「もう自分たちのような思いは絶対させたくない。それが一番の望み」と言います。別の地域の人たちにも自分たちのような思いをしてほしくない、自分たちの教訓を生かしてほしいと、子どもながらに言います。その昔、津波の碑を建てた人たちも同じ思いだったはずですよ。

津波の常襲地域、釜石で私が最初に直接行ったのは子どもたちの防災教育ではなく、地域の方々の防災講演会でした。大学の研究者にできるのは地域で講演会を行うことぐらいだと思っていました。高齢者大学ですが、人は前のほうにパラパラ。毎回同じ顔ぶれで、防災講演会にわざわざ足を運ぶのは、最初から意識の高い人です。私が本当に話さないといけないと思う人は来ません。講演を繰り返すうちに「これではいけない」と思いました。

3・11で、釜石の人たちは本当に逃げなかったのです。なぜか。明治29年の明治三陸津波の後、昭和三陸津波やチリ地震津波もあったのですが、それでもかなりの時間がたち、高齢の方しか経験者がいません。

そして何よりも、釜石には湾口防波堤ができました。中心市街地を守るため、湾の入口をふさぐように水深63メートルの場所に堤防をつくりました。水面上の部分を入れると70メートルで、ギネスブックに載っています。建設に30年間をかけ、1200億円を投じました。物理的な安全度は高まったことで、市民が「これでもう大丈夫」と思い始めた状況がありました。

しかし、湾口防波堤は明治三陸津波を想定してつくられました。逃げないうちに明治三陸津波を超える津波が来たら、これまでになくひどい被害が生じます。

地域が災害に向きあえるように子どもたちの育みの環境をつくる

気づいた以上、とにかく防波堤に頼らず、津波が

来たらちゃんと逃げる地域にしないとイケない。そんな思いで始めた講演ですが、限界も感じていました。そこで、できることなら何でもやろうと、学校で子どもたちの防災教育をやろうと思いました。日頃は大学生を相手にしているから、小学校1年生のこんな小さな子にどう話しかけていいかも正直わからない。苦手でした。それでも何とかしなければという思いで学校に行きました。

少し早く着いたので、校庭で遊んでいる子どもに「ねえ、ここは昔から何度も津波がきてるの知ってる?」と聞いたら、「知ってるよ」と言う。「じゃあ君、どこに逃げる?」と聞いたら、自信満々に「逃げないよ」と言うんです。「どうして」と聞くと、「だって、立派な堤防ができたじゃん」と答えました。

「立派な堤防ができて、昔よりちょっと安全になったね。だけど、あの堤防は明治時代の津波を参考につくってる。次の津波はそれより小さいと言える? 相手は自然だから、時にはもっと大きいのも来る。その時、君は逃げなかったら、どうなる?」

この子は、はっと気づくんです。それでも口をとがらせて、こう言いました。

「だってうちのじいちゃんもばあちゃんも、逃げないって言ってるもん」

この子は何も悪くないです。「逃げない」と言ったのは、「逃げない」と言う子どもに育てられたからです。釜石市民はみんな「逃げない」と言う。学校で防災教育を受けても、うちに帰れば「地震がきても大丈夫。立派な防波堤ができた」と言われる。しかし、この子は生きている間に次の津波に必ず遭います。

そう考えた時、私の中で明確で絶対的な目標ができました。この子が津波に向きあった時に、絶対に生き抜ける力を持った子にしてあげる。それが防災教育です。学校の中だけで教育してもダメです。学校でどんなに教えても、地域社会や家庭がそうでなければ、子どもたちは学校で習ったことを単なる知識にしまいます。

高齢者大学でじいちゃんたちに言いました。この前の津波警報の時に「逃げなくても大丈夫」と言ったでしょ。それがどういう意味を持つかわかっていますか。じいちゃんは、その背中で孫の命を奪うこともあるとまで言いました。さすがに孫の話は禁じ手で、これはめっちゃくちゃ効きました。「この町に住むからには、津波に向きあうのはお作法だから」と、地域をあげて取り組んでくださいました。

3・11のあの日の行動は、そんな地域の取り組み、育みの環境がそうしてくれたと私は思います。「釜石の奇跡」と私がやったように言われますが、違います。私が行ったのは2か月に1回程度です。日々子どもたちを育ててくださったのは地域の方々であり、学校の先生方でした。地域を災害に向きあえるよう導

いていく。それが本当の意味での次の世代の防災教育です。

釜石は、3・11にそれが少なからず機能しました。

鶴住居には堤防を越えて16メートルの津波がきて、小学校の校舎の3階の上を抜けていきました。体育館の屋根もスクールバスも鉄くずと化しました。私は「本当にこんなことがあるのか」と思いました。この学校はハザードマップでは、明治三陸津波が来たラインの外側に建っています。それでも津波は3階を超えました。もし校舎の3階にいたら、鶴住居地区の約600人の子どもたちはまとまって死んでいただいでしょう。

鶴住居は低平地で、海から1.7キロ離れないと高台がありません。どうやって生き延びられるのかと思えるような条件で、残念なことに約600人の方が亡くなっています。でも学校にいた子どもたちは死んでいません。一生懸命に高台まで逃げてくれました。

釜石東中学校と鶴住居小学校の2つの学校があり、雪が横なぐりに降っていました。2時46分、子どもたちはグラウンドでサッカーのボールを蹴っていました。揺れが始まると立っていられなくなりました。液状化なのか水がザーと浮いてきて、地割れが起こりました。中学生が先に立ち上がって、「津波がくるぞ」「逃げるぞ」と大声をあげ、校舎に向かって走っていきます。それから揺れる中を小学校へ行き、子どもたちに「降りてこい」と大声をあげながら、一緒に高台に向かって逃げました。

その声を聞いて、青いジャージを着た中学生も、赤白帽をかぶった小学生も、校舎からどんどん降りてきて一緒に逃げました。少し離れた鶴住居保育園では、保育士さんが0歳児をおんぶし、1歳児、2歳児など小さい子はベビーカーの大きいのに乗せて、年長さんは手を引いて出てきました。中学生はその子たちを抱きかかえ、1.7キロを走り抜いてくれました。

中学校の女の子の作文を読んだのですが、本当に立派でした。

「小学生の男の子が私の手をギュッと握ってきた。怖かったんだと思う。だけど私は後を見ちゃダメと言った。後を見ると足がすくんで動けなくなるような気がしたから」

彼女は保育園児を抱きかかえて、小学生の男の子と一緒に走って逃げました。

もし、この子たちが逃げなかったら……。

ハザードマップでは大丈夫、明治三陸津波でも大丈夫だった。ふつうなら「校舎の3階に上がりなさい」です。子どもたちはなぜ逃げたかということ、私がか子どもたちに避難の指導をする際、行政の人には怒られそうですが「ハザードマップなんか信じるな」と言ったんです。釜石市のハザードマップは一つの想定に過ぎない。想定なんかにとらわれるなど。

それには明治三陸津波はここまできたと赤いライン

が引いてあり、小学校も中学校も大丈夫な場所でした。津波がもう一回来たらと想定してシミュレーションを行い、ハザードマップを子どもたちに配っていました。配られたら、オレンチセーフ、おまえんちアウトと、子どもたちは大騒ぎ。「なぜセーフなの？」と聞くと、「だって色がついてないもん」と答えました。

地域の大人もハザードマップをそのように見ると思っています。皆さんもそうではありませんか？

「この通りになるわけがない。たまたまこのシミュレーションではそうだが、もっと大きな津波が来るかもしれない。うちはセーフだと言っている君も、どうなるかわからない」

そう言ったら、子どもたちも「そうか、これは単なる一つのシナリオなのか」と、はっと気づく。そこが子どもの頭の柔らかいところです。

自分の命を守るのは自分です。相手は自然ですから、想定にとらわれてはいけません。もちろんハザードマップも大事ですが、それでも一つのシナリオにすぎません。そんな謙虚な気持ちで自然に向きあえるような社会にしないとはいけません。

「どんなことが起きても、できるのは最善を尽くすこと以外ない」

私は子どもたちに、こう教えました。

「どんなことが起きても、君ができるのは最善を尽くすこと以外ない」

最善とは、これ以上は何もできないこと。大事なのは、自分の命を守ることに對し、自分の責任で懸命にやったかどうかです。要するに、主体性を持って向きあったかどうかです。

「先生、私の最善よりも津波のほうが大きかったら、どうなるの？」と質問されました。迷わず「それは死ぬということ」だと答えました。非常に厳しい言い方ですが、もちろんちょっとフォローもしています。

「でも先生は、君のような元気な若い子が精いっぱい最善を尽くして、それでもダメだった事例を知らない」

いや、本当はあるかもしれませんが。私の勉強不足かもしれません。でもそんなことはどうでもいいのです。要は子どもたちに「君が精いっぱいのことをやれば、それでいい」と教えたかったのです。それを3・11のあの日、子どもたちはやってくれました。

私は避難訓練のモデル授業をしましたが、私の思いを受け取ってくれた学校の先生方がいます。そして、防災教育をするのは学校だと言わず、じいちゃんやばあちゃんたちが一生懸命に避難訓練をやりました。

「わしらがこうやって逃げないと、子どもらが迎えに来てしまう。この地域で暮らすには、こうやって年寄りが逃げるのを教えないと。それはこの地に住むお

作法だから」

子どもたちに背中を見せようと意識して、おじいちゃん、おばあちゃんたちがやってくれました。それが、あの子たちの命を守ってくれたと、私は思っています。

「おじいちゃん、おばあちゃんが、子どもたちに生き残る知恵を教えてくれた」

3・11の前ですが、私は中学生に、こんな話もしました。

「災害で亡くなる人の7、8割はお年寄り。じいちゃん、ばあちゃんは、どうやって高いところまで逃げたらいい？ このままでは、またお年寄りがいっぱい死んじゃうぞ」

するとみんなリヤカーを引く練習を始めたんです。一人暮らしのおばあちゃんのところへ行き「ばあちゃん、どこへ逃げるかわかる？ 逃げられんなら、リヤカーを引いて迎えに来るから」と声をかけて回りました。私も一度ついて行きましたが、あるおばあちゃんが子どもたちにこう言いました。

「わしか？ わしのことはええ。わしのようなもんを迎えに来て、あんたらや消防の人たちが死ぬようなら、わしのことはええ」

そうすると中学生は「ばあちゃん、津波なんかで死んじゃいやだ」と言いました。おそらくおばあちゃんはうれしかったのでしょう。納屋にしまい込んでいた乳母車を引っ張り出して、掃除して、歩く練習を始めたんです。それに中学生がつきあいました。

「ばあちゃんね、今は40分かかかるけど、20分で行けるようになったら助かるよ。ばあちゃん、がんばれ、ばあちゃん、がんばれ」

おばあちゃんうれしかったでしょう。帰りは私と一緒に歩いて帰った時、おばあちゃんはこう言いました。

「こんなことしても、助からんよ。わかっとるよ。でも、こうやってあの子らが迎えにきてくれると考えたら、助かる、助からんではなく、逃げんといかん。こうやって揺れたら逃げることを、あの子らに教えないといかんのよ」

改めて地域の防災力とは何か、考えさせられました。これから、どこの地域でも豪雨災害が荒ぶる状況になります。行政の力ではどうにもならない状況もあります。個人の力でも対応できない事態もあります。それでも地域の力こそ、私は防災の本質として機能すると思います。ぜひ、防災をきっかけに地域をどうつくるか、考えていただきたいと思います。一番見苦しいのは何でもかんでも役所頼みという体質です。主体性を持った地域住民をどうつくるのか。それが課題です。それをぜひ、地域を代表される皆さんが先導していただきたいと思います。